

ととろざわ未来電力

5年連続の黒字経営を実現 地域密着で価格以外の価値追求

ととろざわ未来電力は設立から一貫して地域密着で低炭素電気の安定供給を重視する。黒字経営が続き、さらに経営方針に需要家のニーズがマッチしてきたと実感している。



地域エネルギーの現場に行く



電力自由化を契機に地域新電力が各地に誕生した。ただここ数年、国内の電力市場価格のスパイクや世界的なエネルギー資源価格の高騰で、経営の岐路に立つ新電力は少なくない。そうした中、埼玉県所沢市が中心となり設立したととろざわ未来電力は、設立から5年連続で黒字を確保。その経営や事業にはどんな特徴があるのだろうか。

同社は所沢市が50%超を出資し、JFEエンジニアリング、飯能信用金庫、所沢商工会議所も出資して2018年に発足した。きっかけは、11年の東日本大震災の経験からエネルギーの



中村俊明代表

安定供給の在り方を見つめ直したことだ。市は14年に「マチごとエコタウン所沢構想」を策定。有限なエネルギー資源に過度に依存しないライフスタイルへの転換を目指した。

副市長で同社代表の中村俊明氏は「電源立地地域の取り組み

の上に都会の利便性が成り立っていると痛感した。地域の再生可能エネルギーの普及とエネルギーコスト削減を進めるため、『エネルギーで支える地域のくらしと地球の未来』を経営理念として掲げ、新電力を立ち上げた」と振り返る。

価格ヘッジスキームが奏功 再エネと未利用エネが柱

地産電源として、メガソーラー所沢やフロートソーラー所沢さらにFIT（固定価格買い取り制度）ではないソーラーシェアリングや東部クリーンセンターでのごみ焼却熱発電などを活

用する。もともと同センターをJFEエンジニアリングが委託管理していたことや、環境負荷の少ない電源を多く保有していたため、同社が新電力経営に参画した。併せて、JFEグループで地域新電力支援を手掛けるアーバンエナジーを介し、同社の契約発電所からの相対調達も行う。

ととろざわ未来電力の電源構成は、日本卸電力取引所（JEPX）への依存度が低い点が特徴だ。清掃工場が72%、次いで太陽光14%、そのほかが14%。なお清掃工場のうち、45%が再生エネの廃棄物バイオマス、27%が未利用エネルギーとなる。さらにアーバンエナジーが提供する市場連動のFIT電力を含む全調達電力を対象とした価格ヘッジスキームが、安定経営につながっている。「市場価格が安い時期は思うところもあったが、今となつては安値より価格の安定化を重視し続けてきて良かった」（中村氏）

ととろざわ未来電力では再エ

ネ+未利用エネ比率が86%と目標を上回り、市内地産地消比率20%という目標もクリア。また23年度のCO₂排出係数が1kW時当たり0.28kgと、30年のND C（国別削減目標）に近い水準を実現している。

特色ある料金プラン 地元球団応援や子育て支援

高圧の公共施設約100件や低圧約600件はところざわ未來電力が直接供給し、年間販売電力量は約3700万kW時。他方、高圧の民間事業者向け約30件はアーバンエナジーの取次で



地産電源の一つ「フロートソーラー所沢」

供給する。設立から数年は低価格の他電力会社に押され、民間との契約が伸び悩んだものの、足元では低CO₂メニューと、何よりエネルギー資源価格に左右されない安定感へのニーズが高まり、さらなる顧客獲得への手ごたえを感じている。

料金プランの出身については、例えば低圧向け基本メニューの「トコロんプラン」は低CO₂で地域の大手電力会社の標準料金よりお得な内容だ。このほか地域密着型のプランも目立つ。

埼玉西武ライオンズファンをターゲットとした「ライオンズでんき」は、電気料金の1%相当を球団強化費用に活用するプランで、選手とのサイン会などの特典を用意する。また子育て世帯を応援するプランもあり、中学生までの子を持つ家庭には契約開始から3年間、毎年2カ月分の基本料金を無料にする。地域の課題解決に資するプランの提供という、地域新電力に期待される役割を果たしている。

今年度から新電力経営に影響を与える新たなファクターとして、容量抛し金がある。同社の場合、主要な需要である公共施設はデマンドコントロールが難しく、一定程度抛し金の負担が生じる。ただ、アーバンエナジーが自社の電源調達先と交渉しての調達単価の値下げなどで、今年度は需要家に大きな負担を求めず乗り切る目途をつけた。また、業界としてコストが増加する中、低CO₂電力により、民間高圧分野を中心に今後契約拡大を図っていく。

字経営を維持する見通し。他方で発電側課金など地域の発電所に関わる制度改定での契約や手続き変更などが多く、ステークホルダーへの説明が一層求められている」（同）と強調する。

経営のかじ取りが難しい中でも、地域の課題は見据えつつ、家庭での再エネ自家消費を普及・拡大、今後増大する卒FIT大規模電源の確保、蓄電池の活用——とチャレンジの構想はまだまだある。「地域の需要家の『自産自消』という究極の目標に向け、引き続き取り組みを加速させたい」と前を見据える。



提供：所沢市

焼だんご

武蔵野台地の中でも所沢周辺だけで親しまれるソウルフード。米粉を水で練り丸め、蒸して竹串に刺し、醤油を塗って炭火などで焼く。米粉のしっかりした歯ごたえと、焼けた醤油の香ばしい香りがほかの団子と一線を画す。市民に愛され続ける地元の味だ。一説では太田道灌が鷹狩りの帰りに所沢付近に立ち寄った際、出された団子が始まりとも。

地域の魅力発信